

氏名	舟橋 怜佑
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	甲第 1238 号
学位授与の日付	2020年3月8日
学位論文題名	Feasibility of the International Classification of Functioning, Disability and Health Rehabilitation Set for inpatient rehabilitation: Selection and validity of a set of categories for inpatients in a convalescent rehabilitation ward 「ICFリハビリテーションセットの入院リハビリテーションにおける適用可能性：回復期リハビリテーション病棟入院患者に適用可能な項目セットの作成とその妥当性の検討」 Japanese Journal of Comprehensive Rehabilitation Science. in press
指導教授	大高 洋平
論文審査委員	主査 教授 園田 茂 副査 教授 渡辺 宏久 教授 宮地 栄一

論文内容の要旨

【緒言】

国際生活機能分類(ICF)は、世界保健機関(WHO)により開発された、生活機能の状態を記述するための包括的な国際分類である。心身機能、活動や参加に関わる様々な生活機能、および環境因子を1,400以上にわたる項目により分類しているが、臨床で使用する場合、全てを評価に適用するのは困難である。この問題に対し、リハビリテーション患者に横断的に使用可能な30項目のICFリハビリテーションセットが発表されている。ただし、ICFリハビリテーションセットは入院中の評価が困難な項目も含んでおり、入院患者の評価時に欠測値となり得る。欠測値が多いと臨床スケールとして合計点を用いた議論が行いづらく、統計に利用しやすい項目セットの確立が望まれる。また、臨床で用いるには評価スケールとしての妥当性も重要である。

【目的】

本研究では、ICFリハビリテーションセットの項目のうち回復期リハビリテーション病棟入院患者に適用可能な項目を検討して項目セットを作成し、Rasch分析により内的構成概念妥当性を検討した。

【対象】

回復期リハビリテーション病棟に入院中の295例の患者を対象に、横断的に実施した。対象患者の年齢は17～101歳、男性177例、女性118例。疾患の内訳は、脳血管疾患172例、

大腿骨近位部骨折27例、脊髄損傷23例、その他が73例。発症後期間は17～177日間であった。

【方法】

ICFリハビリテーションセットを用い、0-4の評価点で各項目を評価した。患者を担当している医療者のうち1名が対象の各項目に対して評価した。評価点が8または9であるものを欠測値とし、その割合が10%未満である項目をリハビリテーションセットとして選択した。天井効果および床効果については、合計点が最大値または最低値を示す割合がそれぞれ10%を超える場合に天井効果、あるいは床効果を有すると定義した。内的構成概念妥当性を検討するためRasch分析を実施した。全体的なRaschモデルへの適合はカイ二乗検定により検討し、適合が不良である場合に改善する手法としてテストレット法を使用した。

【結果】

7つの項目において10%以上の欠測値を認めたため、それらを除いた23項目の合計点を計算した。天井効果、床効果はいずれも観察されなかった。選択した23項目の合計スコアを用いたRasch分析ではRaschモデルに適合しなかったため、4つの大項目にまとめテストレット法によるRasch分析を実施したところ、適合性は改善した。さらに一部項目で神経疾患とそれ以外の患者を別に解析する処理を行うと、適合性はさらに改善した。

【考察】

欠測値を認めた原因は、年齢、プライベートな内容を含む項目があること、入院患者に適用しにくい項目があることなどが考えられた。最終的に解析に用いられた23項目には、通常臨床では評価の対象外の項目が含まれており、患者中心の新しい視点を持ち込むという意味があるように考えられた。23項目の項目セットは多様な項目からなるにも関わらず、全体的にはRaschモデルへの良好な適合が得られた。疾患によるばらつきが観察されており、今後より多様な背景を持つサンプルを扱う場合にはデータの層別化が必要となるかもしれない。

【結語】

本研究では、ICFリハビリテーションセットの項目の中で、回復期リハビリテーション病棟患者において欠測値の少ない項目を明らかにした。その結果から23項目の項目セットを作成し、算出されたスコアを用いてRasch分析を行い、良好な内的構成概念妥当性を有することを示した。

論文審査結果の要旨

本研究では、国際生活機能分類(ICF)の普及目的で作成されたICFリハビリテーションセットから入院患者に適用可能な項目セットを選び、Rasch分析によりその内的構成概念妥当性が検討された。

回復期リハビリテーション病棟に入院中の295例の患者を対象にICFリハビリテーションセットを採点し、欠測値の割合が10%未満である項目が選択された。天井効果、床効果はいずれも観察されなかった。選択した23項目の合計スコアを用いたRasch分析ではテストレット法と項目分割を行った後は良好な適合が得られ、臨床スケールとしての内的構成概念妥当性を支持する結果であると述べられた。

質疑では、ICF研究全体のなかでの本研究の位置付けが問われ、入院患者に本評価が適用できるかの検討であると回答された。既存の評価法との違いとして情動面・生活機能を評価することが可能との議論になった。包括性と採点負担のトレードオフをどうするか、高次脳機能障害を有する患者に対する本評価法の適用については検討の余地があるなどの指摘があった。また用いた統計学的指標や解析内容についても十分な議論の上、妥当であると判断された。

本研究は、ICFリハビリテーションセットを初めて入院患者に適用し妥当性を検討したもので、今後、本研究成果を踏まえた臨床現場におけるICFリハビリテーションセットの使用が期待されている内容であり、学位論文として適切であると判断された。